

を示したが高血流域で過小に、低血流域で過大に評価された。これは、高血流域と低血流域で  $^{123}\text{I}$ -IMP の挙動が異なるにも関わらず、頭部全体の放射能で平衡時の SPECT を補正することにより生じた誤差であると考えられた。一方、平衡時の SPECT を短時間 SPECT のそれぞれの部位のカウントで補正した rCBF (rCBFCb) は rCBF と優れた相関を示し過大評価、過小評価も見られなかった。静注後早期の再構成カウントの推定には短時間 SPECT 上のカウントを用いる方法がより望ましい。

## 2) $^{123}\text{I}$ -IMP SPECT による脳血流量とヘマトクリット値、 $\text{PaCO}_2$ および $\text{PaO}_2$ との関係

古沢 哲哉 (鶴岡市立荘内病院) 放射線科  
小田野行男・高橋 直也 (新潟大学放射線科)  
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

$^{123}\text{I}$ -IMP-SPECT により算出した脳血流量と、ヘマトクリット値、 $\text{PaCO}_2$ 、 $\text{PaO}_2$  との関係について統計学的な解析を行った。

脳血流量とヘマトクリット値、脳血流量と  $\text{PaCO}_2$ 、それぞれの間には有意な相関が得られた。また、脳血流量と年齢との間にも有意な相関が得られた。

$\text{PaCO}_2$  と、テント下あるいは基底核領域での平均局所脳血流量との間に相関は得られなかった。これは、脳深部血管には  $\text{CO}_2$  反応を抑制する神経因子(自律神経支配)があり、大脳皮質部のそれに比べてその作用が強いためと考えられる。

## 3) $^{123}\text{I}$ -IMP と SPECT を用いた動脈血一点採血法による簡便な脳血流測定法の開発

小田野行男・高橋 直也 (新潟大学放射線科)  
樋口 健史 (新潟大学医療技術) 短期大学部  
大久保真樹 (新潟大学医療技術) 短期大学部

動脈血を一点採血するだけで、rCBF の絶対値を測定できる方法—One Point Ca (t) 法—を開発した。この研究は  $^{123}\text{I}$ -IMP のマイクロスフェア法の延長線上にある。5分間の持続動脈血採血法を用いたマイクロスフェア法による rCBF 測定と同時に、5分から10分まで1分毎に動脈血を一点採血して IMP の濃度 One Point Ca (t) とし、5分間の動脈血中濃度 integral Ca (t) との関係进行分析した。その結果、6分の値が最もよく相

関した ( $r=0.85$ )。この値を用いて rCBF を求め  $^{133}\text{Xe}$  吸入法と比較すると、 $r=0.77$  で良い相関が得られた。

## 4) III 期非小細胞肺癌の加速多分割照射について (Accelerated hyper-fractionation)

清野 康夫・斉藤 眞理 (県立がんセンター) 放射線科  
栗田 雄三・木滑 孝一 (同 内科)  
横山 晶

1989~93年に当科で放射線治療を施行した通常分割照射22例と多分割照射19例とを比較し照射の一次効果について検討した。

奏効率でみると通常分割照射64%に対して多分割照射95%と良好な成績であった。

また縮小率を両群間で比較すると、照射直後は明らかな差ではないが、1か月後では多分割照射群が明らかに良い成績であった。

副作用は十分耐えうるものであった。

Historical control study であり、化学療法の併用法も多種にわたっているため単純な比較は難しいが、多分割照射法は一次効果については良い反応を示している印象を受けた。

## 5) 睾丸 Seminoma の放射線治療成績

森田 哲郎・末山 博男  
杉田 公・土田恵美子  
松本 康男・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)  
稲越 英機 (新潟大学医療技術) 短期大学部

1968~1990年までに当科で放射線治療を施行した睾丸 pure seminoma の新鮮例は30例であった。年齢は中央値 35.5 (22~67) 歳で、部位別には右11例、左19例であった。既往歴は停留睾丸2例、鼠径ヘルニア2例、精巣静脈瘤1例、精索摘除1例であった。日本泌尿器科学会病期分類による病期では Stage I 23例、II 6例、III 1例であった。照射部位と線量に関しては Stage I では患側腸骨動脈周囲に 2890 cGy もしくは全骨盤に 3525 cGy、および腹部大動脈周囲に 2890 cGy を照射した。Stage II では全骨盤に 3800 cGy もしくは患側腸骨動脈周囲に 2745 cGy、および腹部大動脈周囲に 3600 cGy、さらに鎖骨上窩に5例、縦隔に1例照射した。30例のうち2例のみが原腫瘍死している。全体の5生率、10生率は 93.2%、84.5%で、Stage I ではそれぞれ 95.5%、89.8%、Stage II ではそれぞれ 100%、83.3%と良